査を2002年2～3月に実施しました。調査区は北区15㎡と南区2㎡を設けました。北区では奈良時代の四王堂創建時の西北隅の掘立柱穴を検出しました。柱穴は一辺が2m以上と巨大です。柱を抜き取った後、ほぼ重複した位置に礎石を据えた礎石据付穴を確認しました。基壇には平安時代の瓦積み外装が残り、西大寺創建時から平安時代までの瓦のほか、凝灰岩や川原石も用いられています。創建時の建物や基壇の規模を踏襲して、平安時代に礎石建物へと造り替えたと推定されます。創建時の四王堂は過去の調査とあわせると、東西が約32.5m、ほぼ11丈となり、西大寺に伝わる資財帳の記載に一致します。南区では地表下30㎝が地山で、くぼみをいくつか検出したのみです。（平城宮跡発掘調査部）

四王堂発掘現場（北西から）

藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第117次）

大極殿院の東面回廊などを対象とした南区につづき、去年の12月からは、大極殿東方に建つ「東殿」を対象とした北区の調査にはいっています。

この部分は、もとの鴨公小学校・幼稚園の敷地にあたり、それにともなう攪乱を受けています。そのため、遺構の残りはあまりよくありません。しかし、約60年前に日本古文化研究所が壺掘り調査した成果を、あらためて見直さなければならない多くの知見が得られつつあります。

まず、大極殿院回廊は、従来、「東殿」以北が単廊（梁行の柱間が1間）と復元されていましたが、「東殿」以南と同じく、複廊（梁行の柱間が2間）であることがほぼ確実となりました。

そして、「東殿」についても、これまでは桁行7間、梁行4間と復元されていましたが、少なくとも梁行については、それよりかなり小さくなることが判明しつつあります。今後、「東殿」の性格についても再検討が必要となりそうです。

細部では何かと疑問点が多かった藤原宮大極殿院の構造を、より整理されたかたちでご報告できる日も近いでしょう。

大極殿院「東殿」と大極殿土壇（東から）

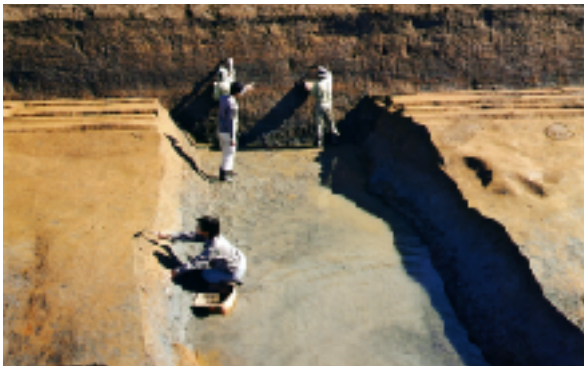
藤原宮東南官衙地区の調査（飛鳥藤原第118次）

2001年10月末から2002年2月までおこなった、高所寺池という溜池の堤防改修工事にともなう調査です。池の東・北・西の三面を、総延長200m、およそ2000㎡にわたって発掘しました。調査区は、藤原宮の南面大垣と内外の濠を含み、「東南官衙地区」とよんでいる区域にあたります。

調査にはいってまもなく、大垣とその南北に濠がみつかりました。藤原宮の大垣は、掘立柱を土壁でつなぎ、瓦葺きの屋根をのせた構造です。ただ、大垣と内濠はほぼ想定位置で発見されたのですが、外濠は想定位置よりも7m大垣寄りにありました。

調査区には、宮内先行条坊とよばれる藤原京の街路の一つ、東二坊坊間路がとおっています。普通、藤原宮の施設はこの先行条坊の側溝を埋め立てて造営されているのですが、南面の外濠は側溝と一時期共存しており、側溝を流れる水が外濠に注ぎ込むように掘り直されていました。まず、排水体系をつくり、そののち側溝をうめて大垣の柱をたてたり内濠を掘削していたのです。外濠の位置だけが想定位置とずれた理由も、このあたりにありそうです。

大垣の北側、つまり宮の内側では、役所の建物や


藤原宮南面の外濠（西から）

それを囲んでいた塀がみつかりました。平城宮では「式部省」が位置する場所ですが、藤原宮ではどんな役所があったのか、今後、出土した遺物を整理しながら考えてみたいと思います。

また、このあたりは、弥生時代以降には人が住みついた形跡があり、とくに古墳時代の5世紀以降になると生活の痕跡がよく残っています。出土した土器に韓半島のものに似た「韓式土器」があったので、渡来人のムラだったのかもしれません。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

文化財関係研修の実施

発掘技術者研修「遺跡保存整備課程」

11月23日から12月12日の日程で表記の研修をおこないました。参加者は例年よりすこし少なめの12名でした。この課程は、遺跡を整備するときに必要となる基本的な考え方から、設計・積算にいたる専門的な知識・技術の習得を目的としています。遺跡（そこから）発掘（何が判り）整備計画（それをどのように）整備施工（して）管理・活用（人に判ってもらおうとするのか）を旨とした研修内容です。講義内容は、遺跡整備関連諸分野と整備実例です。設計実習は、各自が地域で抱える遺跡整備の課題を持参し、受講の成果を踏まえ、参考図書にあたりながら自ら考え、独創的な図面として具現していく作業です。「久々に充実した1カ月だった」との研修生の感想文には、講師陣もとても勇気づけられました。

設計実習風景

発掘技術者研修「遺跡地図情報課程」

今年度の「遺跡地図情報課程」は12月18日から12月21日におこないました。短期の研修は、研修計画作成の時に、長期の研修の隙間に割り当てられるため、どうしても研修生や講師が集まりにくい時期になる傾向があるように思われます。この研修は未だ特殊な分野であり、講師を求めるとなると特定の人物に依頼するほかないという状況です。そのため、日程の調整がむずかしく、概説から始めて各論を順に展開しにくい状況となっています。本年もこの点について研修生から不満の声があがりました。この不満は充分に予測できたので、研修の流れとGIS分野の関係について研修当初に説明をおこなったものの、理解が及ばないむきがあったようです。実習をおこなってほしいという要求も、機器・ソフトのレンタル費用や電源設備を考えると実現が困難な課題でもあります。

さて、そういった問題点はあるものの、最新の計測技術や標準化動向とともに、具体的な研究への応用例を学ぶことができ、多くの研修生が充実した研修期間を過ごしたことも事実です。帰郷した彼らが、行政での導入が急速に進展しているGISを、これからの文化財行政・研究に正しく活用されることを願っています。

発掘技術者研修「報告書作成課程」

1月16日から1月25日まで、表記の研修をおこないました。この研修は、毎年希望者が多く、受講者決定に四苦八苦していますが、今年も定員を越える応募がありました。時期的に年度末をひかえ、各自治体において、報告書の刊行が間近に迫っていることもありますが、大学等においても、体系的に本作りの話を聞く機会がほとんどないことも関係しているようです。結局、文字通り、北は北海道から南は沖縄まで、通いの人を含め、定員を6名越えた30名の受講生が参加することになりました。

カリキュラムは、これまでと同様、“読みやすい”“わかりやすい”をモットーに、報告書作成の理念的な面から始まり、レイアウト・編集、製版・印刷という報告書作成の流れのなかで必要な知識・技術を身に付けてもらおうというもの。毎年のことではありますが、受講生にとっては、日頃、あまり目にすることのない印刷現場を見学したり、耳にすることの少ない現場の苦労話が聞けたことはよかったとの声があがっていました。

発掘技術者研修「遺跡環境調査課程」

今年度の「遺跡環境調査課程」は、1月31日から